
[新訂増補]母子と家族への援助

妊産婦のストレスケアと子どもの育ち

吉田敬子著

金剛出版, A5判 230頁, 3,740円, 2024年5月刊

(ノートルダム清心女子大学) 日下紀子

本書は、2000年に出版された『母子と家族への援助—妊娠と出産の精神医学』を約4半世紀ぶりに副題も新たにした新訂増補版である。精神科医の著者は、日本や英国での40年にわたる臨床実践と調査研究に基づいた多くの新しい知見とエビデンスから本書を構成する。第5～7章では出産後の精神障害についてまとめられ、第8～12章では、周産期の精神薬物治療と妊娠・母乳栄養、母子相互作用と子どもの発達の予後への影響、喪失者の精神病理が取り上げられ、母子と家族の精神保健の充実をもって最終章が締めくくられる。随所に図表と事例が紹介され、その解説コメントから具体的、实际的に確かな知識と理解を得られるのが本書の魅力ある特徴である。

なかでも第4章「育児支援におけるカウンセリング」は特に興味深い。カウンセリングを「自己の成長を目指したり、問題や悩みを訴えるクライアント（およびその家族、環境）に対して、カウンセラーが主に言語的交流と人間関係を通して、心理的に援助していく営み」（村瀬、1996）と定義し、「カウンセラーのこころの深さ、人間理解の確かさに応じて、クライアントは自己開示して来る」ことを心に留め、「常に治療者は自分の言動をどこかで覚めた目で見るともうひとりの自分を必要とする」と述べている。言葉が独り歩きしないように、「自分のしたことは役に立ったのだろうか」と考える謙虚さや自己を内省する能力は、セラピストのこころの機能の根幹であるだろう。「Scienceとしての最新の知識をもって、かつ相手が真に求めている援助の内容やレベルについて共感性をもって察知し言葉を介して相手との根元的で人間的な交流を行うというArtを駆使しながら両者を統合して初めて実現していくプロセス」は、サイコセラピーそのものを意味し、評者には、その言葉から精神分析医ビオンのバリセミナーでの問い

「あなたはどんな Artist?」が連想された。

ところで、妊娠・出産期において、かつての自らの母親など養育者との否定的な関係性や世代間伝達の問題が再び前面に出てくる時、「目の前の育児や仕事における問題に肯定的に対処し自己効力感を得られる体験から過去の関係性を客観化できる場合が多い」と述べている。なかには個人セラピーが必要な場合もあるが、大切なのはクライアントが情緒的サポートを体験しつつも、自分自身の力で乗り越えたという実感が残り、将来の何か困難に直面した時に自力で解決しようとする原動力になることであろう。支援者は改めてどのような支援法がクライアントにとって適切なのかを見立て、選択することが重要である。

本書は、妊産婦や経産婦とその子や家族の支援者に限らず、将来子どもに関わる皆に読んでほしい。特に保育士や幼稚園教諭、教員、心理士、支援者は、きっともっと早くにこの本に出会っていたらよかったと思うのではないだろうか。将来そうした対人援助職を目指す学生にも教科書としておすすめしたい。
